

ここにしかない景色・アート・文化

佐久島が、まってる。



「ピーヒュロロロー」。大空をゆっくり旋回するトンビの鳴き声。一緒に聞こえてくるのは、風に揺れる木々のさざめきと、かすかな波の音だけです。黒壁の集落の細い路地に立てば、どこか懐かしい雰囲気になります。季節の花が咲く道の先には、思わずシャッターを切りたくなくなる不思議なアートたち。佐久島にしかない景色と特別な時間が、あなたを待っています。

取材／金原拓矢

エーゲ海の白いまちと佐久島の黒壁

一 色港から市営渡船に揺られて約20分。島内に2か所ある渡船場のうち、最初に到着するのが佐久島西港です。少し歩くと見えてくるのは、見事な石垣の上に立つ崇運寺。かつて徳川家康が滞在したと伝わる大きな寺です。さらに奥に進んだところには、瓦ぶきの家々が密集しています。くねくねと曲がった細い路地が続く集落内は、まるで迷路のよう。古くから残る民家の多くは、壁が黒く塗られています。これは、潮風による木材の劣化を防ぐため、島民が船底に塗るコールトールを壁にも塗ったことによるものです。明治から昭和初期にかけて全国の漁村で当たり前の光景でしたが、今もなお残る地域はほとんどありません。日本の原風景ともいえる美しい黒壁の集落は、世界有数の観光地であるギリシャのミコノス島が「エーゲ海に浮かぶ白い宝石」と呼ばれるのに対して「三河湾の黒真珠」と称され、佐久島のシンボルとなっています。

「黒壁運動」のきっかけはおばあちゃんの一言

黒壁の町並みを保全・修復する取り組み「黒壁運動」は、平成16年に始まりました。島民で構成する「島を美しくつくる会」が主体となって毎年行い、今年は2月3日に開催。朝早く集まった島民と島外からのボランティア約200人がそれぞれの持ち場に分かれ、色が落ちてきた民家の壁やアート作品を黒く塗り直していきます。





「以前は家を塗り直したい島民にペンキを配り、自分たちで塗ってもらっていた。だけどもある時、一人のおばあちゃんに『うちも塗りたいけど体が動かなくて自分で塗れない』と言われた。それがきっかけで、ボランティアを募り、一緒に塗ってもらったのは、島を美しくつくる会の会長を務める鈴木喜代司さんです。つくる会の中心メンバーとして、長年にわたって島の活性化のために尽力しています。最初はボランティアを30人募集したら50人集まった。次の年から90人、100人と徐々に参加者が増え、今では200人の募集枠がすぐに埋まってしまふ。佐久島の良さに魅了されたボランティアが島外で宣伝してくれるため、さらに参加者が増えているそうです。約2時間の作業が終わると、島の女性たちが作った温かいおでんや味噌汁が振る舞われ、参加者は充実感に満ちた笑顔で味わいます。鈴木さんは「ボランティアの人たちが喜んで食べてくれるから、島の女性たちもやりがいを持って協力してくれている。島外の方がたくさん集まってくれることで、島の人たちも黒壁を

黒壁、太鼓、海 島の宝をいつまでも



鈴木喜代司さん



誇りに感じるようになってきた」と、活動の効果を語ってくれました。

島の祭りに欠かせない 佐久島太鼓

独 自の打ち方と重厚な音色が特徴の「佐久島太鼓」。「ブチ」と呼ばれるバチは途中で緩くカーブし、野球のバットのようなグリップが付いています。島で祭りがある時には必ず演奏される、大切な文化の一つです。一時は演奏の担い手不足に悩みましたが、貴重な伝統を次世代に残そうと、島の長老たちが若者たちを指導。現在は佐久島太鼓保存会や佐久島小・中学校が中心となって継承に取り組み、祭りやイベントでその音色を披露しています。

佐久島太鼓で島を盛り上げようと、平成21年から毎年開催されているのが「佐久島太鼓フェスティバル」です。島内外から和太鼓グループが多数参加し、大勢の観客を前に熱いパフォーマンスを繰り広げます。昨年は節目となる第10回を迎え、秋の恒例イベントとして定着しています。



環境大臣賞を受賞

中学生が始めた藻場再生活動

佐久島の海をもっと豊かにしたい——中学生のそんな思いから始まったのが、海に自生するアマモを守り、水質の浄化に重要な藻場を再生する活動です。佐久島中学校では、平成12年から総合学習で調査や保全活動を継続。毎年6月に行う「アマモ移植ボランティア」や、海岸清掃などを行っています。これらの取り組みが高く評価され、昨年4月に「みどりの日」自然環境功労者環境大臣賞を受賞しました。



200人以上が参加する「アマモ移植ボランティア」





観光客は年間10万人 個性豊かなアートが人を呼ぶ

若い女性を惹き付ける
洗練されたアート

白い箱のような建物が2つつながる姿が印象的な『イーストハウス』。観光シーズンの週末には、写真を撮る人で長い行列ができる人気のアートです。他にも島にはちよっと不思議なアートが点在。アートを目当てに多くの観光客が訪れています。平成13年から現在まで佐久島アートをプロデュースしているのは、芸術・文化関連の企画会社、有限会社オフィス・マッチング・モウル（岡崎市）です。「アートが好きなのは楽しみを積極的に見つけられる人。そういう人は絶対に島のことも好きになってくれる。都会のおしゃれな若い女性をターゲットにアートプロジェクトを進めれば、観光客が増えると思った」と話してくれたのは、代表を務める内藤美和さんです。

「島のアートを巡ってもらうことで、自然の良さにも気付いてもらえる。そのためにはアートのクオリティーが高くなければ



内藤美和さん

ならない」。アートの製作は基本的にアーティスト任せですが、製作の意図に疑問があれば、納得できるまで企画の練り直しを求めるそうです。特に「忘れたい」と完成までのエピソードを語ってくれたのは、石垣海岸にある『おひるねハウス』。製作のゴーストを出すまでに、作者である南川祐輝さんの提案を2度はねのけたそうです。「それまでの提案は全然ダメ。南川さんにはこの場所での何がしたいの、と聞いたら昼寝がしたいと返ってきた。だったら昼寝すればいいじゃないって」。このやりとりの末、3度目の提案を基に完成した『おひるねハウス』は、内藤さんいわく「完璧な作品」。周囲の景色と調和して美しく佇む、佐久島アートを代表する作品となりました。



4



2



1

作品名と作者(敬称略)

- ①『星を想う場所』 荒木由香里
- ②『佐久島の秘密基地／アポロ POINT』(長岡勉+田中正洋)
- ③『おひるねハウス』 南川祐輝
- ④『海神さま』 松岡徹
- ⑤『北のリボン』 TAB



5



3

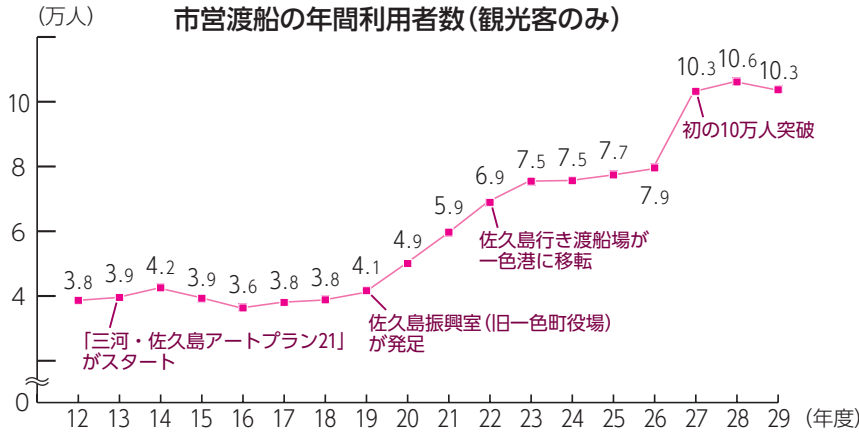


ここにしかない景色・アート・文化
特集 **佐久島が、まってる。**



3年連続で10万人突破

島民や通勤・通学などの利用を除く29年度の市営渡船の利用者数は、10万3,668人。3年連続で10万人を突破しました。渡船場の移転による利便性の向上や、メディアへの登場による注目度の高まりが影響しています。



東京から吹いてきたアートの風

テレビや雑誌などのメディアで佐久島が取り上げられるのは年間約100件。かつて3万人台に落ち込んでいた年間の観光客数は、10万人を突破するまでになっています。島おこしの鍵となったアートが島にやってきたのは、過疎の危機感が島中に蔓延していたころのことです。

平成7年、開発が進まず人が減り続けていた島に、国土庁(当時)の調査委員会が視察に訪れました。アートディレクターや作家、旅館の女将など、東京都で活動する女性だけで構成する委員会は、黒壁の集落や豊かな自然を他にはない島の魅力だと高く評価しました。島民が「当たり前」だと思っていた風景が観光資源として見直されたことをきっかけに、全国でも例がないアートによる島おこしが始動。翌年には島おこしの担い手として「島を美しくつくる会」が設立され、取り組みが始まりました。

しかし、イベント開催による一時的な集客以外に効果が表れず、次第に島民の間で不満が募ります。「自分をつくる会に入っている、とはとても言いたくない状況だった」と会長の鈴木さん。真剣な議論の末、アート事業のパートナーを現在のオフィス・マッチング・モウルに変更。平成13年に「三河・佐久島アートプラン21」が始まりました。模様替えした取り組みは「祭り」とアートに出会

島とともに歩む行政

「島」がテーマ。アートと島の祭りや自然、景観と一緒に楽しんでもらうことで、訪れた人に島の魅力を体感してもらおうというものです。祭りと同時にアートイベントが行われ、景観を生かしたアート作品が増えていった結果、佐久島ならではの風景とアートを楽しもうと、多くの人が島を訪れるようになったのです。

市

では、島民の生活や観光を含む島おこし、渡船など、島のほぼ全てのことを佐久島振興課という部署が担当しています。島民と職員が常にコミュニケーションを取ることや信頼関係を築き、問題が起きた場合は迅速に対応しています。

愛知県では、佐久島と日間賀島、篠島(いずれも南知多町)の生活環境の整備や産業振興などに取り組んでいます。観光面では、3島をまとめて「あいちの離島」と銘打ち、離島の特徴を生かしたPRを全国に向けて展開。平成23年には、公募で選ばれたスタッフが島で暮らしながら離島の魅力を発信する「あいちの離島80日間チャレンジ」を実施しました。佐久島は東京都出身の新里碧さんが担当。島での暮らしの中であった出来事を漫画にして発信しました。また、新たな島の名物として開発した「弁天島の願い石」は、今年1月に有名タレントが登場するテレビ番組で紹介され、大きな話題を呼びました。

島民全員で島おこし 島を美しくつくる会

島を美しくつくる会は、島民の自主的な活動を通して島を活性化しようと設立されました。

島民全員が会員となり、里山の保全や海岸清掃などを行う「ひと里分科会」、島の食材を生かした名物料理の開発などを行う「美食分科会」、アサリの漁場再生やアマモの移植を行う「漁師分科会」、伝統文化の継承や文化財の整備を行う「いにしえ分科会」の

4つの分科会に分かれて活動。自然や風土、祭り、産業といった佐久島の魅力をさらに磨き上げるため、さまざまなことに取り組んでいます。また、アートプロジェクトへの支援や定住希望者への空き家の紹介なども行っています。

平成15年には、全国の地域づくりの模範として**全国地域づくり推進協議会会長賞**を受賞。また、アマモによる藻場再生活動への積極的な支援が評価され、昨年10月の「全国豊かな海づくり大会」で**環境大臣賞**を受賞しました。この他にも数多くの賞が贈られています。



歩いて、食べて、時々ねこ 四季折々の島を楽しむ



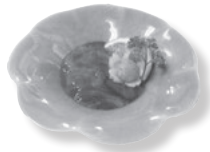
新鮮な海の幸を生かした 佐久島グルメ

大アサリ、タコ、フグ、エビ、カキ、地魚…。佐久島を訪れば、新鮮な海の幸を存分に味わえます。

島の食堂では、タコの冷しゃぶやカキの浜焼き、刺身、大人気の大アサリ井などを提供。季節ごとの旬の魚をフライにしてサンドした「さくバーガー」という、ユニークなメニューもあります。舌もお腹も満たされる、豊かな三河湾の海の幸を味わってみてください。

冬の時期にお薦めなのが、ナマコの内臓を塩辛にした珍味、コノワタ。江戸時代には千石船で幕府に献上された極上の一品で、当時から独自の製法を今に受け継いでいます。ご飯のおかずや酒の肴に最適です。冬になったら、ぜひ一度ご賞味あれ。

さくバーガー



コノワタ



タコの冷しゃぶ

ランチも、おやつも おしゃれなカフェで一息

島内には若い移住者が出店するおしゃれなカフェが点在。「小腹がすいた」「お茶と一緒に」「そろそろランチにしようか」など、気分に合わせて気軽に立ち寄れます。

どの店にも必ず、島の素材を使ったこだわりの名物メニューが用意されています。島野菜で作った和菓子や、手作りのシフォンケーキなどが人気。自家焙煎のコーヒーやカクテルが楽しめる店もあります。店の場所や外観もそれぞれ特徴的で、目の前に海が広がる開放感あふれる店もあれば、緑に囲まれた秘密基地のような店も。個性的なカフェを巡ってお気に入りの場所であたりと島を楽しんでください。





若い店主が中心となって開催 島とまちをつなぐ39の市

「**今**」は仕事をしながらでも常に39の市のことを考えている。少しずつ佐久島の地元色が出てきたし、西尾市のイベントとして定着していったらいいな」。「Cafe OLEGALE」のオーナー加藤麻紀さんは、島出身で素潜り漁師の旦那さんとの結婚を機に、佐久島に移住してきました。カフェを営む傍ら、島の手作りマルシェ「39の市」の主催団体「made in sa kushima」の代表を務めています。平成28年に始まった39の市は、年2回のペースで島のイベントに併せて開催。島内外から出店者を募り、島の旬な食材や手作りの品を販売しています。島のウォーキングイベント「歩け歩け海原三里」が行われる3月3日(日)には、第6回を佐久島西港広場で開催します。



加藤麻紀さん

「西港でやるのは初めて。佐久島に来た人は必ず通る場所だし、たくさんの人に来てほしい」と加藤さん。今回はこれまでも好評だった島の野



菜や干物、タコ飯、島内外の出店者の手作り小物の販売などに加え、新企画が盛りだくさん。島の春の風物詩、わかめしゃぶしゃぶの販売や、漁船で島を一周するクルージングなどが行われます。「茶褐色の生ワカメを湯にくぐらせると、きれいな緑色になる。いつも食べている島の人は当たり前だと思っているけど、まちに住んでいる人は知らないと思う。今の時期一番おいしい新鮮なものを驚きと一緒に味わってほしい」と笑顔で話してくれました。「メンバーもそろってきたし、島の人たちもすごく協力してくれる。いろんな人の存在なしには開催できない。39の市をきっかけに島に来てください」。

季節の花に囲まれて いつでも楽しめる島巡り

佐久島では、2つのスタンプリーを一年中体験できます。島内外の常設アート作品24点を巡る「佐久島アートピクニック」と、黒壁集落や森の中に点在する祠をたどる「佐久島弘法巡り」です。スタンプリーは渡船場や弁天サロン、さくナビなどで配布しています。

また、春・夏・秋の年3回行われる「歩け歩け海原三里」や、弘法の日に行われる「弘法道ウォーキング大会」などのウォーキングイベントを開催。同時開催のワークショップや祭りを一緒に楽しめると好評です。いつ来ても共通するのは、島の四季折々の風景を楽しめるということ。ハマダイコンやヒガンバナ、サザンカ、スイセン、梅など、季節の花が一年中あなたを待っています。



弘法道ウォーキング大会



島の新たな名物に サクのいもプロジェクト

島を美しくつくる会は、佐久島産のサツマイモを名産品にする「サクのいもプロジェクト」に取り組んでいます。西尾市とJA西三河の支援を受けて平成29年に始動。島で昔から作られているサツマイモを新たな島の名物として販売することで島民の収入の増加につなげ、定住者の確保も目指しています。

「去年の秋は1トンほど収穫できた。猛暑の影響で目標の2トンの半分だったけど、今年は土作りか

サツマイモを収穫する 愛知淑徳大学の学生



ら工夫したい。相生ユニビオ株式会社(下町)さんから提案があり、今は芋焼酎の開発を進めている」と、つくる会会長の鈴木さん。芋焼酎は試飲会を行い、使う品種を決定。芋焼酎のネーミングやラベルの作成などは、島の若手や、プロジェクトに協力している愛知淑徳大学の学生と連携して行い、4月に発売する予定です。

2頭

ヤギ

フラワーロードでのんびり過ごしている「ノン」と「ビリー」。週末に行くと100円で餌をあげられるかも。



「どうもビリーです」

0基

信号機

島に信号機はありません。でも車は道路を走っています。道を歩いたり自転車で走ったりするときは、安全に十分注意してください。



ちよつと気になる 佐久島の数字

約100匹

猫

正確な数は分かりませんが、詳しい方によるとこのくらいいるのではとのこと。佐久島で撮影された映画「ねことじいちゃん」(岩合光昭監督作品)が公開中



225人

人口

(31年2月1日現在)

かつては1,600人以上の人が住んでいました。観光客や移住者は近年増加傾向ですが、定住者をさらに増やすことが今後の課題です。

カモメの数の正解者にプレゼント！

オリジナルポストカード付き乗船券

4月1日(月)までに、はがきに郵便番号・住所・氏名・『カモメの駐車場』のカモメの数を記入の上、秘書課「乗船券プレゼント」係(〒445-8501住所不要)へ応募してください。正解者の中から10人に**版画家「猫野ぺすか」デザインのオリジナルポストカード付き乗船券**をプレゼント。その他の方にはもちろん**佐久島オリジナルクリアファイル**をプレゼントします。当選の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

問 秘書課広報広聴担当 (☎65・2159)

?

カモメ

大浦海水浴場にある木村崇人さんの作品『カモメの駐車場』。さて、カモメは何羽？ 答えは自分の目で確かめてください。



佐久島への行き方

一色港の佐久島行船のりばから、市営渡船を一日7往復運行しています。乗船時間は約25分。船のりばまでは、西尾駅発着の名鉄バスが運行しています。

●市営渡船

渡船料金(片道) ▶中学生以上…820円 ▶小学生…410円

※小学生未満のおさんは大人1人につき1人まで無料

問▶渡船全般に関する事…佐久島振興課渡船担当 (☎72・9607/さくナビ内)

▶渡船の運行状況に関する事…佐久島行船のりば(☎72・8284)

市営渡船の時刻表(通常ダイヤ)

佐久島行き	一色行き	
一色港発	佐久島東港発	佐久島西港発
6:30	7:00	7:07
7:40	8:30	8:37
9:30	10:10	10:17
11:30	12:30	12:37
13:40	14:50	14:57
15:50	17:15	17:22
17:50	18:20	18:27



佐久島の
ここがいい



1



2



3



4



5



6



7



8

- ①鈴木喜代司さん
- ②弁天サロンの管理人 相川光江さん
- ③佐久島中学校 2年 千田健士郎さん
- ④佐久島中学校 3年 鈴木元久さん
- ⑤加藤麻紀さん
- ⑥早田亜樹さん(左/東京都)、小嶋隼月さん(右/神奈川県)
- ⑦筒井文彦さん
- ⑧佐久島中学校 3年 勢力暖さん

自分だけの「佐久島」が見つかる

12月から3月ごろまで、島のそこかしこで白いスイセンの花が咲いています。

かつては山あいでもひっそりと咲いていたスイセンを、島の人たちが人の目にふれる場所に植え替え、大切に育ててきたのです。洗練されたアートは多くの人を呼び寄せましたが、島の人たちはアートに頼るのではなく、アートを引き立てるための自然や文化を磨き続けてきました。

信号機もコンビニもない佐久島には、島の人たちや島に関わる人たちが大切に守ってきた、佐久島にしかない風景がたくさんあります。黒壁の集落を散策するもよし、アートやカフェを巡るもよし、静かに自然を体感するもよし。ゆったりとした島の時間を過ごすうちに、きっとあなただけのお気に入りの場所や楽しみ方が見つかるはずです。